

「私はひとつ、
人間の第七官にひびくやうな詩を書いてやりませう」
詩は尾崎翠を癒し、幸福感や病からの回復をもたらした

尾崎翠の詩と病理

石原 深予 ● 著

尾崎翠以前の「第七官」使用例を辿り、
「第七官界彷徨」の解釈に新境地をひらく
新発見の作品・書簡を収録、同時代評を紹介

尾崎翠は1896(明治29)年、鳥取県岩美郡に生まれ、1971(昭和46)年、肺炎のため満74歳で死去した。1931年に代表作「第七官界彷徨」で独自の境地をひらいて好評を博し、次々に作品を発表しはじめるが、翌1932年病を得て帰郷した。この帰郷により文学活動から遠ざかり「黄金の沈黙」をつらぬいた。それにも関わらず戦後1950年代後半から再評価が始まり、死後ますます読者を得て現在に至る。その再評価の流れは、尾崎翠やその作品を「神話化」することにも繋がった。本書では「脱神話化」することを目指し、ハイセンスな尾崎翠像の再構築をはかる。



四六判 上製

【論文編】

序章

第一章 「第七官」をめぐって

——明治期から昭和初期における「第七官」の語誌と
尾崎翠の宗教的・思想的背景——

第二章 「第七官界彷徨」論

——「喪失感」と「かなしみ」、「回想」のありかた——

第三章 「歩行」論

——おもかげを吹く風、耳の底に聴いた淋しさ——

第四章 「こほろぎ嬢」論

——神経病、反逆、頭を打たれること——

第五章 「地下室アントンの一夜」論

——ロシア文学受容、統合失調症の精神病理を補助線として
終章

【資料編】 新たに確認できた資料

一 尾崎翠自身による書簡・作品

「冬のよ」「海と小さい家と」(紀行文)「こだちの中」(詩)

「現文壇の中心勢力について」「影の男性への追慕」

「母のための知識 西洋音楽の聴き方」他

二 同時代評および同時代人との関係を示す資料

【著者:石原 深予 いしはら みよ】京都市立大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得認定退学。博士(文学)。2010-11年、中国・西安外国語大学東方語言文化学院日本語学部外国人教師。現在、京都市立大学大学院学術研究員。
著書に『前川佐美雄編集『日本歌人』目次集:戦前期分』『郷土出身文学者シリーズ⑦ 尾崎翠』(共著)、『近代仏教スタディーズ(仮)』(共著、法蔵館、2015年刊行予定)がある。

申 込 書	書店名・番線印		尾崎翠の詩と病理
		冊	ISBN978-4-908055-08-9 C3095
	ご担当者様		定価 = 本体 3,500 円 + 税
	月 日		ビーイング・ネット・プレス TEL 042-702-9213 FAX 042-702-9218

●取引取次はトーハン、日販、大阪屋、栗田、太洋社です。3月5日までのご注文は「委託扱い」になります。
他の取次帳合の場合は直販、または、トーハン渡しの返条付注文扱いとなります。(担当 埋田)

ビーイング・ネット・プレス

Fax 042-702-9218

〒252-0303

神奈川県相模原市南区相模大野 8-2-12-202 Tel 042-702-9213